

1 1	海部	あま市立甚目寺小学校	ニノミヤ カズシゲ 名前 二 宮 和 茂
分科会番号	1 5	分科会名	進路指導・キャリア教育

研究題目

持続可能な社会のつくり手となる児童の育成を目指して

研究要項

1 研究のねらい

本校の教育活動は、長年取り組んできた ESD を柱に、SDGs を意識した実社会とつながる主体的な学びに焦点をおいている。ESD すごろくや ESD カレンダーを用いて、総合的な学習の時間や出前授業、各教科での学習、学校行事等、一年の流れを各学年の掲示板に掲示し、ふり返りができるようにしている。児童は、今後の活動を知ること、目的意識をもって活動に取り組むことができる。

令和5年度からはキャリア教育の視点を取り入れた活動を盛り込み、キャリア教育を「職業教育」ではなく「生き方教育」として捉えた。児童自身がよりよく生きていくために、また自分の世界を広げるために必要なことは何であるかを探るきっかけを見つける機会を多く設定した。世界のさまざまな課題と SDGs とのつながりを確認し、「持続可能な世界を築くためには、何をどうしていけばよいのだろうか?」「SDGs の達成のために、自分にはどんなことができるだろうか?」と一人ひとりが考えて行動できる児童の育成を目指した。

1年目は、本校の今までの流れを踏襲しつつ、さらにキャリア教育に焦点を当てていった。従来より実施している体験活動を引き続き行ったり、新たな活動を設定したりする中で、キャリアパスポートの充実を図っていった。

2年目は、キャリアパスポートの効果的な活用方法と、ESD すごろくの活用に焦点を当てて研究を進めていった。

3年目は、全学年が「人間関係形成能力・社会形成能力」の育成に重点を置き、「自他の理解能力」と「コミュニケーション能力」の向上をねらい、「自他の理解能力」を向上させるためにキャリアパスポートを用いたふり返りと、それをもとにした発表を行うことを通して、記入するだけでは気付くことが難しかった自分の成長等を児童が理解できる姿を目指した。

以上のような三年間の取組を踏まえ、昨年度の課題であるキャリアパスポートへの記述や発表資料の作成の際に、児童によって理解度や表現力に差があり、支援が必要な場合があったことに加え、低学年児童や、自分の考えを言語化することに不慣れな児童への個別支援の方法について考える必要があった。

また、異学年交流では、内向的な児童や人見知りの児童は自分から関わろうとすることが難しく、積極的に関わられるような配慮や支援の方法について課題が残った。特に活動におけるペアの偏りが大きく、交流が活性化しないペア活動があり、そのようなペアへの具体的な手だてを構築していくことが求められた。

そこで、これらの課題を踏まえて、今年度は、キャリアパスポートへの記述について工夫するとともに、異学年が自然と関わられるような方法を研究することにより、持続可能な社会のつくり手となる児童の育成を目指していきたい。

2 研究の仮説と方法

(1) 研究目標

研究のねらいをもとに目指す子ども像を以下のように設定した。

- ・ 互いに認め合うことができる子
- ・ 多様な集団の中で豊かな人間関係を築ける子

(2) 研究の仮説

仮説1： キャリアパスポートの記述を工夫することで、多様な考えを尊重する態度を育むことができるだろう。

仮説2： 異学年における交流を活性化することで、より豊かな人間関係を築く力を高めることができるだろう。

(3) 研究の仮説

○ 仮説1に対する手だて

手だて 行事の内容のふり返しにおいて、児童の実態に応じてキャリアパスポートの記述を工夫する場を設定する。

○ 仮説2に対する手だて

手だて ペア学年活動を定期的に行い、学年の壁を越えた関わりが自然と営まれる活動や工夫を行い、交流をより活性化するきっかけづくりを行う。

(4) 研究対象

キャリアパスポート	全校児童 529 名
異学年交流会・体験活動	1 年生 85 名 2 年生 77 名 3 年生 108 名 4 年生 82 名 5 年生 96 名 6 年生 81 名

3 実施計画 () は該当学年

月	内容
4 月	1 年生を迎える会（全学年） キャリアパスポートⅠの記入「年度初めの目標」（全学年）
5 月	キャリアパスポートⅡの記入「運動会」（全学年）
6 月	児童会主催の仲よし会（1・6 年）（2・4 年）（3・5 年）
7 月	キャリアパスポートⅢ「出前授業・体験活動など」記入（1・2・3・4 年）
9 月	キャリアパスポートⅢ「修学旅行」記入・（6 年） 児童会主催の仲よし会（1・6 年）（2・4 年）（3・5 年）
10 月	キャリアパスポートⅢ「野外学習」記入（5 年） キャリアパスポートⅣ「前期のふり返し・後期の目標」記入・発表（全学年）
12 月	総合学習発表会（全学年）
3 月	6 年生を送る会（全学年） キャリアパスポートⅤ「学年のふり返し」記入（全学年）

4 実践内容

(1) キャリアパスポート

① キャリアパスポートの活用方法の改善

～全校で共通して取り組める環境づくり～

年度当初、現職教育部会において昨年度までのキャリアパスポートの活用状況を振り返り、児童がより主体的に活用できる方法について検討した。その結果、これまで学年ごとに様式や活用方法が異なっていたものを見直し、「年度初め」「前期・学年のふり返し」「学年行事」「出前授業・体験活動」など、記録する場面を五つに整理し、全学年で共通して取り組むことにした。様式を整理したことで、教職員間で活用方法を共有しやすくなるとともに、児童にとってもキャリアパスポートを「自分の成長を記録し、見返せるもの」として継続的に活用しやすい環境を整えることができた。これまで担任が一括管理していたキャリアパスポートは、児童一人ひとりが自分で管理することとした。ロッカーや教室内の取り出しやすい場所に保管することで、必要なときにすぐに見返すことができるようにした。日常的にキャリアパスポートを目にする環境を整えたことで、ふり返しは「特別な時間にだけ行うもの」ではなく、「日々の学習や学校生活の中で自然に活用する」意識を育てることを目指した。さらに、活動の内容に応じて記録の方法も工夫した。例えば運動会では、「練習に取り組む前」「練習を通して」「本番を終えて」の三つの段階を一枚の用紙に継続して記録する形式とした【資料1】。活動の途中で自分の目標や取組を見直しながら記録を積み重ねることで、「練習で意識したことを本番で活かすことができた」「途中で目標を修正したこと」で最後まで頑張ることができた」など、自分の成長や考え方の変容を実感しやすくなるようにした。

② 発達段階に応じたキャリアパスポートの工夫

～書きやすさと自己理解を深めるために～

1・2年生では、自分の経験や気持ちを文章で表現することが難しい児童が多いため、記述する内容を「見つけた友達のよいところ」「成長できたところ」「思い出ランキング」などに絞り、視点を明確にして振り返ることができる様式とした【資料2】。自分の頑張りを五段階で自己評価する欄を設けることで、自分の努力を振り返りやすくし、文章を書くことへの負担を軽減した。同じ視点で繰り返し記入することで、自分の成長を比較しやすくとともに、「友達に助けてもらった」「自分のために頑張ってくれた人がいた」など、周囲との関わりにも目を向けられるよう工夫した。

さらに、1・2年生では運動会のキャリアパスポートの記述内容や様式を統一した。1年生で経験した書き方を2年生でも継続して活用できるようにすることで、新しい様式に戸惑うことなくふり返しに取り組めるようにした。また、同じ視点で記録を積み重ねることで、「去年よりも最後まで走り切ることができた」「友達を応援することを意識できるようになった」など、自分自身の成長や変容をより実感しやすくなるよう工夫した。

中学年では、活動前・活動後の両方を記録することを大切にした。活動前には「自分のめあて」を設定し、活動後には「できたこと」「次に頑張りたいこと」「今後の生活や学習で生かしたいこと」を記

運動会の前を考えてみよう

がんばりたいことはなんですか	
けちやまふたいそう	おおきくおどる
ちよっこりたまいれ	うしろおおきくかかんはいたい
ときようそう	かんぱうていはいなりなり

れんしゅう

けちやまふたいそう	れんしゅうでがんばりたいことなんですか おおきくおどる
ちよっこりたまいれ	おおきくおどるふり
ときようそう	おおきくていはいなりなり

【資料1】キャリアパスポート

運動会を振り返ってみよう

よくひょうはどれくらいできていましたか。	
けちやまふたいそう	できた (5・4・3・2・1) でなかった。
ちよっこりたまいれ	できた (5・4・3・2・1) でなかった。
ときようそう	できた (5・4・3・2・1) でなかった。

みつけた友達のよいところ

けんた君のおおきくおどるのうしろは、うしろはいたい。

おもいでランキング!!!

① けちやまふたいそう

② ちよっこりたまいれ

③ ときようそう

うしろはいたい。

うしろはいたい。

うしろはいたい。

【資料2】視点を絞ったキャリアパスポート

入する形式とした。活動前にこれまでのキャリアパスポートを見返す時間を設けることで、自分が立てた目標を意識して活動に臨めるようにした。

高学年では、活動前に記入用の様式を事前に児童に示し、どのような視点で学習に臨めばよいかを確認する時間を設けた。見通しをもって活動することで、出前授業の講師の思いや工夫、印象に残った言葉、自分の生活や将来とのつながりなど、多面的な視点から振り返る姿が見られた。

③ 学びをつなぐキャリアパスポートの活用

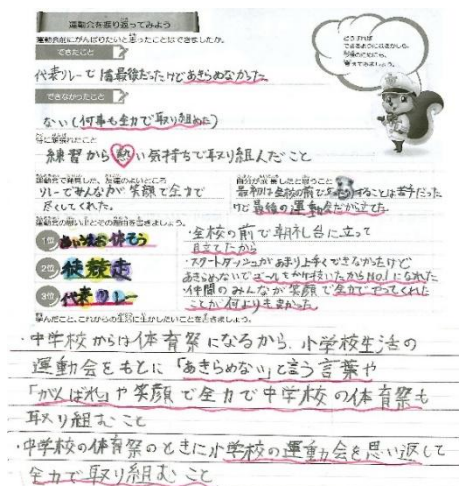
～見返す活動を通して次の学びへつなげる～

キャリアパスポートを活動直後に記録して終わるだけでなく、繰り返し見返しながら学びを深めることを重視した。校外学習や出前授業で記録した内容は、総合的な学習の時間だけでなく、教科の学習においても必要に応じて見返す機会を設けた。

高学年では活動前にこれまでのキャリアパスポートを見返し、自分が以前立てた目標やふり返りを確認してから活動に臨むようにした。事前に記入する内容や視点を確認した上で、これまでの記録を参考にしながら新たな目標を設定することで、見通しをもって学習に取り組むことができた。

段階的に記録を積み重ねることで、自分の取組を振り返りながら次の行動につなげる姿が見られた。「練習からよい気持ちで取り組めた」「途中で目標を変えたことでよりよい演技につながった」など、活動の過程を振り返ることで、自分自身の成長や課題を具体的に捉えられるようになった【資料3】。

このように、キャリアパスポートを「書いて終わる記録」ではなく、「見返して次の学びや生活につなげる記録」として位置付けたことで、児童は自ら目標を設定し、学習や学校生活をよりよくしようと主体的に考えるようになった。発達段階に応じて記述内容や様式に系統性をもたせることで、低学年から高学年まで一貫して自己理解を深め、自分の成長や変容を実感しながら、将来を見据えて学び続けようとする態度の育成につながった。



【資料3】 充実した振り返り

(2) ペア学年活動

① あいさつハッピーチャレンジ

～あいさつを通して広がる異学年交流の実践～

交流を活性化する手だての一つとして、児童会の公約であった「あいさつハッピーチャレンジ」という活動を実施した。本活動では、3～6年生の代議員と児童会役員が毎朝昇降口に立ち、全校児童へ積極的にあいさつを行った【資料4】。全校児童は、朝から帰りまでの間に校内で10人以上にあいさつをすることを目標とした。帰りの会では、1・2年生は担任、3～6年生は代議員が「10人以上にあいさつできた児童」の人数を確認し、学級の8割以上が達成した場合、翌朝に児童会役員が各学級へハッピーカードを届け、6日間で最も多くカードを集めた学級を表彰することで、全校で意欲的に取り組めるよう工夫した。

実践期間中は、昇降口だけでなく廊下や教室前でも児童同士が自然にあいさつを交わす姿が多く見られた。これまでは親しい友達同士のあいさつが中心であったが、「10人以上にあいさつする」という目標があったことで、自分から進んで声をかけようとする児童が学年の壁を越えて増えた。ペア学年の児童や



【資料4】 あいさつハッピーチャレンジ

普段あまり関わりのない学年の児童にも積極的にあいさつする姿が見られ、交流のきっかけが広がった。

継続して取り組むことで、あいさつを通して相手との関わりをもとうとする意識が高まり、ペア学年をはじめとする異学年交流の活性化につながったと考えられる。あいさつという日常的な関わりを積み重ねることが互いを認め合い、より豊かな人間関係を築くための基盤づくりにつながる実践となった。

② 仲よし会

～異学年交流の活性化～

6月に、1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生でペアを組み、仲よし会を実施した【資料5】。活動内容は代表委員会が企画し、児童同士が自然に交流できるよう工夫した。

3・5年生では、「人間間違い探し」を行った。代議員が前に立ち、服装や身に着けている物、立ち方などを全員でよく観察した後、一度廊下へ出て、「帽子をかぶる」「髪を結ぶ」「名札の位置を変える」などいくつかの変化を加えて再び教室へ戻った。子どもたちはペアで相談しながら、「ここが変わったよ」「さっきはこうだったよね」と互いに気付いたことを伝え合い、協力して答えを考える姿が見られた。活動を通して、5年生は下級生（3年生）の考えを引き出すように優しく声をかけたり、分かりやすくヒントを出したりする姿が見られた。一方、3年生も自分の気づきを積極的に伝え、上級生（5年生）と相談しながら答えを導き出していた。ゲームを楽しみながら自然な会話が生まれ、互いに協力し合う中で、異学年の児童同士の距離が縮まり、交流を深めることができた。



【資料5】 仲よし会

1・6年生では、「シルエットクイズ」を行った。白黒で表された人物や物のシルエットから何かを当てるゲームである。活動の中では、1年生が分からない問題に対して自ら6年生に「教えて」と助けを求めたり、6年生が「これは何だと思う？」と優しく問いかけながら一緒に考えたりする姿が見られた。一方的に教えるのではなく、互いに考えを出し合いながら答えを導く場面が多く見られ、自然な対話を通して関係を深めることができた。

仲よし会終了後には、休み時間に1年生と6年生が校庭で一緒に遊ぶ姿が以前より多く見られるようになった。活動をきっかけとして、ペア学年同士が日常的にも関わろうとする姿が増え、異学年交流が継続している様子がうかがえた。仲よし会は、一度きりの交流で終わるのではなく、その後の日常生活にもつながる実践となった。活動を通して安心して関わることのできる関係性が育まれ、ペア学年を中心とした異学年交流の活性化と、互いを思いやる豊かな人間関係づくりにつながったと考えられる。

③ 1・6年ペア活動

～継続的ペア活動を通して育む豊かな人間関係～

1・6年生では、4月から7月にかけて継続的にペア活動を実施した。4月22日に行った第1回ペア活動では、あらかじめ決めたペアで顔合わせを行い、6年生が「1年生を迎える会」の招待状を渡したり、鉛筆の正しい持ち方を教えたり、互いの名前をひらがなで書いて紹介し合ったりした。初めは緊張した様子も見られたが、6年生が優しく声をかけることで、1年生も安心して活動に参加することができた。

5月12日には、校内の草取りを行う「クリーンクリーン活動」を実施した。6年生が草の取り方を教えたり、一緒に活動したりすることで、自然と会話が生まれ、協力しながら活動する姿が見られた。

さらに、5月25日には、1年生にタブレット端末の使い方やロイロノートへのログイン方法を教える活動を行った

【資料6】。6年生は相手の理解に合わせて丁寧に説明し、1年生も分からないことを自分から質問するなど、互いに安心して関わる様子が見られた。

このような継続的な交流を通して、ペア同士の関係は少しずつ深まり、日常生活にも変化が表れた。休み時間

には高学年として1年生を気にかけて、自然に声をかける姿が見られたり、登下校では1年生の歩く速さに合わせて6年生が自然と歩幅を調整したりする様子も見られた。また、校内ですれ違う際には、「〇〇兄ちゃん」「〇〇姉ちゃん」と親しみを込めて呼び合う姿も見られ、ペアとしてのつながりが日常生活の中にも広がっていった。

給食では、当番でない6年生が1年生教室を訪れ、配膳や後片付けを手伝う取組をした。掃除の時間には、1年生の先頭に立って掃除の仕方を教えたり、高い場所を代わりに掃除したりするなど、相手の立場に立って行動する様子も見られた。一方、1年生も困ったときには安心して6年生を頼る姿が見られ、互いに信頼関係を築いていることがうかがえた。

継続的なペア活動は、活動時間だけで終わるものではなく、その後の日常生活へと交流を広げるきっかけとなった。6年生には下級生を思いやり支えようとする意識が育ち、1年生は安心して学校生活を送ることのできる心の支えとなった。日常的な関わりを積み重ねることで、互いを認め合い、思いやる関係が育まれ、より豊かな人間関係づくりにつながる実践となった。



【資料6】 タブレット端末の使い方を教える活動

5 成果と課題

(1) 成果

① 仮説1について

- ・ 発達段階に応じた記述や見返しの工夫により、自分の成長だけでなく友達や講師など他者の考えにも目を向け、多様な考えを受け止める姿が見られた。

② 仮説2について

- ・ 継続的なペア活動や仲よし会、あいさつハッピーチャレンジを通して、異学年児童が日常的に関わる機会が増え、休み時間や登下校など学校生活の中でも交流が広がった。
- ・ 上級生には相手を思いやり支えようとする意識が育ち、下級生には安心して上級生を頼る姿が見られるなど、互いを認め合い、より豊かな人間関係を築くことにつながった。

(2) 課題

① 仮説1について

- ・ キャリアパスポートを記述するだけで終わる場面も多く、互いの考えを交流し、多様な価値観に触れる機会をさらに充実させる必要がある。
- ・ 記述内容や見返しの活用には学年差が見られたため、効果的な実践を共有し、全校で質の高い活用を継続していく必要がある。

② 仮説2について

- ・ 異学年交流が行事やペア活動の時期に偏る面もあり、日常的・継続的に交流できる機会をさらに充実させる必要がある。
- ・ 活動内容によって児童同士の関わり方に差が見られたため、全ての児童が主体的に関わり、対話や協力を深められる活動を工夫していく必要がある。